校舎炎上

昭和五二年四月一五日午後一一時四〇分ごろ、母校に火災が発生した。北側校舎一階の階段教室付近から出た火は一気に火勢を増し、渡り廊下を伝わって南校舎に延焼した。盛岡消防署は一一時五〇分に第三出動を発令、同署と市消防各分団から三二台の消防車が駆けつけて懸命の消火作業にあたった。また雨模様の深夜にもかかわらず、市内在住の教職員・在校生・同窓生が続々と学校に駆けつけ、消防団と一致協力して消火作業や重要書類の持ち出しを行なった。

輝かしい歴史を刻んできた校舎も木造のため火には弱かった。猛火は出火から約一時間半後の一六日午前一時一五分にようやく鎮まったが、木造二階建ての校舎面積四八一一平方メートルのうち延べ三四〇〇平方メートルが失われた。ほとんどの教室が灰となり、残ったのは講堂、図書館、雨天体操場、それに南側校舎の職員室の部分だけであった。

不幸中の幸いは付近の民家に燃え移らなかったこと、また一人の負傷者も出さなかったことだった。出火の原因については盛岡消防署と岩手県警察本部が調査し、煙草の火の不始末、あるいは教材用薬品の自然発火など諸説があげられたが、はっきりと断定するまでには至らなかった。

鎮火後七時間ほどしか経っていない四月一六日の朝、登校してきた生徒たちは母校の無残な姿に息をのんだ。しかし全員が講堂に集まり、遠藤貫中校長から「こういう非常のときこそ、むやみに動揺せず、なおいっそうの愛校心を持とう」と諭され、気を取り直して焼け跡の整理に取りかかった。この日の作業は、最上級の高校三年生が中心となって受け持った。

翌一七日は日曜日であったが、二年生が登校して校舎周辺の整理にあたった。また教職員たちは校務運営委員会を開き、一八日以降の段取りを協議した。

教職員・在校生をはじめ、本校関係者の願いは一日も早く授業を再開することであった。そのため、生徒の焼け跡整理作業には真剣みがこもっていたし、一八日の職員会議では教室の割り振りを決めるまでにこぎつけている。

こうして、四月一九日の火曜日から授業が再開された。日曜をはさんで、わずか二日しか休校していない。確かに火災は大きな痛手であったが、この非常時に発揮された石桜精神は、本校の明るい未来を保証するものであった。中学校は寄宿舎の講堂で、高一と高二はそれぞれ焼け残った講堂と雨天体操場で、高三は音楽室と柔道場と図書館でという不自由な授業ながら、教師と生徒の心の絆はかたく結び合わされていた。

昭和52年4月15日　校舎炎上（写真提供：岩手日報社）